

# 「むまわたりはし」, 「うまわたりはし」

——歴史地理学の視点——

東 皓 傳

(受付 1998 年 5 月 27 日)

## 序

1997～98年、広島県山県郡豊平町（図1）で筆者は標記の橋を発見した。「むまわたりはし」は西宗川に架かり庄原と琴谷を結ぶ。「うまわたりはし」は現在2橋の存在が確認されているが（図2）、1橋は上阿坂の吉木川（西宗川の支流）に架せられ、他の1橋は西宗川の水源地の近くにあり橋の親柱は既にみられないが、橋の本体は残っている（写真1～6）。最初の疑問は、なぜ「むま」であるのか、現在は同一町域ではあるもののこれら3橋はかつて隣接する村域であり、「うま」の橋名含めて「風土と馬」の関係はどのようなであろうか、ということであった。一般に橋では欄干の始まりの部分に親柱があり、橋名と河川名が漢字と平仮名で表記される。そして、対角線的關係位置の親柱で橋名を漢字と仮名の両方の表現をするのが一般的で、その逆の親柱相互では河川名を標示する。

「むまわたりはし」のコンクリート建設は1938年（昭和13）、上阿坂の「うまわたりはし」は1935年（昭和10）といわれるが<sup>1,2)</sup>、1956年（昭和31）ま

1) 「むまわたりはし」が鉄筋を入れてコンクリート化された頃は、太田川流域で水力発電所やダムの建設が完成または進行中であった。そして、1936年（昭和11）9月広島鉄道横川—可部間は国に買収されて可部線（電化は1930年1月）となり、安芸飯室への延長は2か月後のことであった。広島市安佐南区古市で八木用水を渡る旧国道に架かる原田橋でも1928年（昭和3）木橋からの改装（むまわたりはしとほぼ同規模）と比べても、地域における標記2橋の重要度が理解される。なお、原田橋は地元中井清雄氏の調査によると、付近の旧家であった原田氏の寄贈によるものであるという。



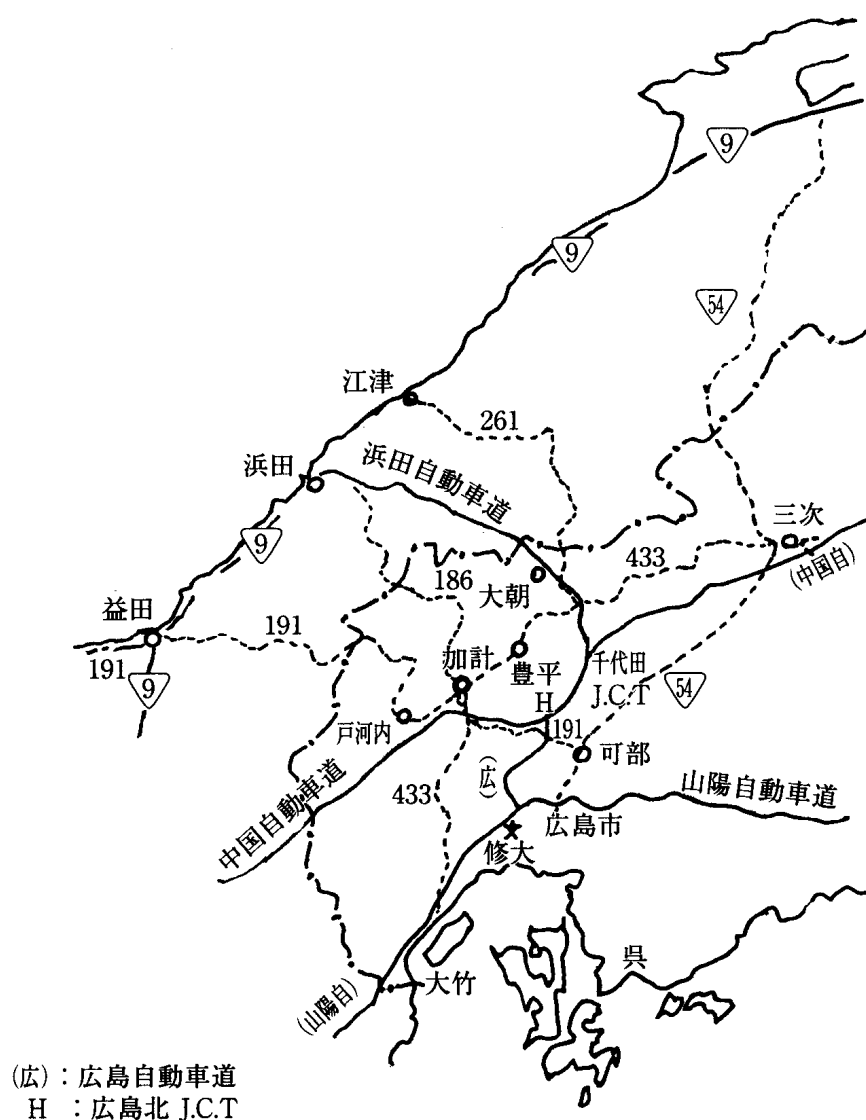


図1 豊平町の概念的な位置

- 2) コンクリート橋に改築された「むまわたりはし」について、1地元民（古老）の談がある。すなわち、改築前は太い丸太を2本渡し、その上に小垂木<sup>こたるき</sup>を敷き並べ、その上に杉の小枝（葉先の部分—ヤバ）を十分に敷きつめ、さらにその上に土を置いて固めてあった。橋を長持ちさせるための先人の知恵がそこに考えられる。なお、後記するが、「むまわたりはし」は主として琴谷側から橋を渡って五厘峠（高さ約20メートル、庄原在）にかかる部分にあり、主な利用の1つは旧家の香川家へ米や鉄を運ぶ馬の通路であった。それゆえ、橋の建設についても、前記の原田橋の例もあるように個人が関係したかも知れない。いずれにしても、当時の建設事情がわかれば「むまわたりはし」の「むま」の解明に1つの道筋が得られるかも知れない。これは「うまわたりはし」についても同様である。

東：「むまわたりはし」、「うまわたりはし」

- abc : 加計から壬生方面へのルート
- Ko : 小十谷 (琴谷)
- N : 西綾ヶ谷 (大畑)
- Y : 行森
- Ka : 勝木
- F : 船峠
- 十 : 十文字峠
- 四 : 四ッ辻
- 今 : 今吉田
- 火 : 火野山 (吉川元春居城跡)
- 吉川 : 吉川元春居館跡
- 古市 : 旧飯室村古市
- A : むまわたりはし (琴庄)
- B : うまわたりはし (上阿坂)
- C : うまわたりはし (西宗)

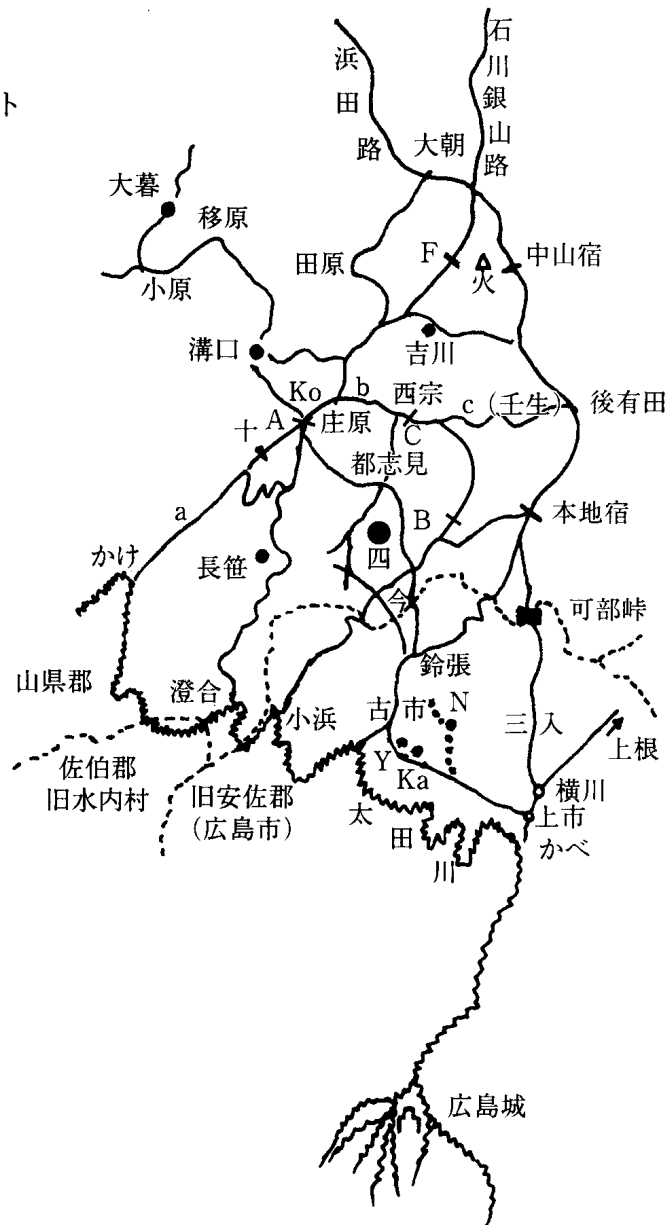


図2 3橋の位置その他

では両橋は別の村であった (なお、西宗の橋は今のところ建設年代不明)。「むま」の存在を指摘した筆者の言に対し、地元の関係者は一様に驚きの声を発し、「うま」か「ま」で始まっていた習慣的な読み方に、改めて警鐘を与える形になった。したがって両橋の呼称のちがいについての説明理由は得られなかった。そこで、昭和の初期までは少なくとも地域に残っていた「むま」について、その国語的表現の現在への変化と、その地理学的な背景



写真1 むまわたりはし, 琴庄地区—俗称



写真2 むまわたりはし, 琴庄地区—俗称

(とくに歴史地理学的立場)を合わせて考えてみた。

現在の地理学の研究目的は「地域性の解明」ということで、一般的にはぼまとめられるようだ。そこで、少なくとも昭和初期まで残っていた「むま」のもつ地域的背景に、現状で可能な限りアプローチする方向が出てくる。また、経済学が経済的事象を、物理学が物理的事象を学問の研究目的とするように、そこにある個的な事象を追究するのとはちがって、地理学

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」



写真3 うまわたりはし，上阿坂

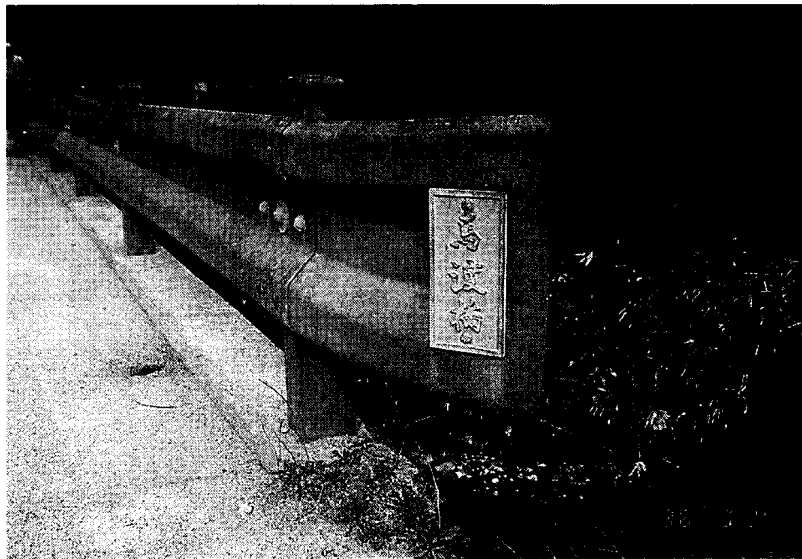


写真4 うまわたりはし，上阿坂

は個的な事象を追究するものではないことを付記しておきたい。人間に関する直接・間接の諸々の事象が，土地や場所と関係して問題にされるとき，そこに地理学の出発点がある。このあたりから，地域性 regionality が指摘されるゆえんであろう。

さて，「むま」の存在から地域と馬→地域社会 Local community の形成が考えられるが，地域社会では人間の集住と経済開発が深く関係している。ま

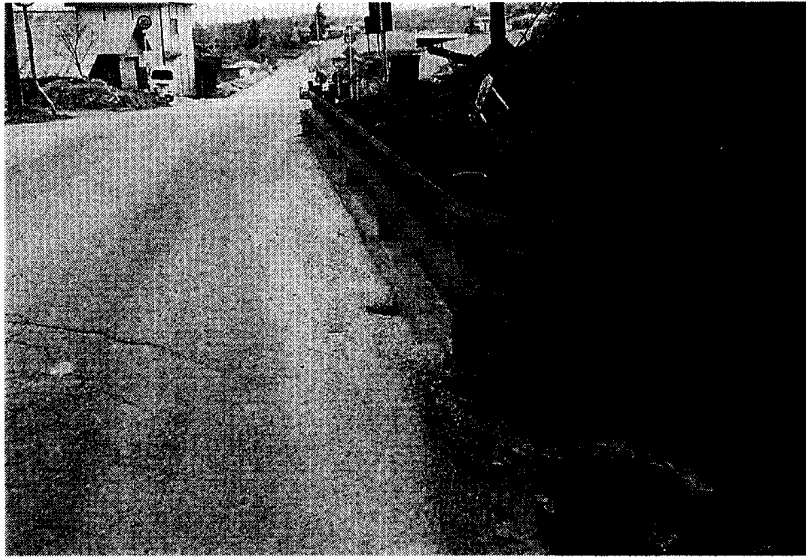


写真5 うまわたりはし, 上阿坂



写真6 うまわたりはし, 西宗

た,「むま」—「うま」の用語の変化も含めて考えれば,歴史地理学の視点が浮上してくる<sup>3)</sup>。そこで,「かるた」<sup>4,5)</sup>のなかにも登場することばも併せ

---

3) 太田川本流筋でも,渡し船のあった付近が架橋に転換していった。すなわち,地域の重要な交通ルートの河川への延長上に渡し船があった。対岸の耕地への連絡も当然のことながら,村と村を結ぶ里道のつながりも社会的に重要であった。地域社会における橋の地位は渡し船の時代の重要な立場をそのまま継承したもので入

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

て考えながら，地元で編集された伝説と民話<sup>6)</sup>も参考にして，歴史地理学の立場から，標題について論じてみたい。

## 1 歴史地理学について

歴史地理学 Historical geography, historische Geographie は，本来，人間の活動 human activity を，過去のある特定の時期について，その場所に即して研究する学問である。そこには時間と場所の問題が同時に存在しており，自然現象も展開し続ける。このような考え方からすれば，ハーツホーン R. Hartshorne のいうように，もう 1 つ別の地理学 Another geography が存在することになりかねない。地理学が広く地域性の研究ということで，現

- ↘ あり，過去から現在の重要な歴史地理学の 1 重要テーマとなっている。すなわち，そこでは単に一過性の強い過去の点的な事象のなかから一定の意味をもった継続性のある事象を選び出して，歴史地理学の研究テーマにするということである。
- 4) 天明年間に歌かるた（百人一首）をまねてつくられたという京かるたであるが，それは押しつけの堅苦しいものではなく，一般の人びとが自分たちで古諺や俗諺を参考につくり上げたもので，子供たちにとっては正月にあえて男女が一緒になって遊べるいわば公認された楽しい会合であった。「むま」の存在を考えるのに，この大衆性は重要な点である。なお，その京かるたにも「ひ」のところで，「瓢箪から駒」があり，駒は馬のことであって，瓢箪が子供のお守，村の禁忌（端午の節句の村休みのときに耕作したものは瓢を背負わせて村から追出す），瓢箪公事（瓢箪の立った子供を家の後継者にした——1601～1619での京都所司代板倉伊賀守勝重の裁判——3 人の子への遺産分配で 3 人の子供が瓢箪をもらったため，誰を後継者にするかということ）など，馬も瓢箪のように本当に社会のなかになじみのある存在として，広く深くとけこんでいたことがわかる。すなわち，（思いもよらぬところから意外なものが出る，考えもしなかったことが現実となる）というように，「馬に角は生える」という絶対にあり得ないことではなくて，仄かな望みを託していることばを採用したところに，一般の人びとの心の温かみを感じられる。
- 5) 尾張（中京）かるたでは，「う」の項で（うしを馬にする），「せ」の項で（背戸の馬も相口）があるけれども，猫判かるた（猫に小判）の京かるたに対する犬棒かるたの江戸かるたでは，馬の出番はないようだ。
- 6) 日岡巖編『豊平町の伝説と民話』豊平町史研究会，1970年，121 ページ。

時点で集約されているゆえんである。

哲学者カントの表現を借りると、歴史は時間の学問、地理は場所の学問ということのようであるが、もちろんそれは主体性の問題であろう。地域性の形成は、過去—現在—未来という長いスパンのなかで考えられるべきもので、そこには時間と場所が同時に介在している。場所があり→人間が居住し→経済が動く→社会・法・政治・文化などの存在や形成—というこれら一連のものは大地の上で行われ、地域性がつくられ、変化していく。そして、これらの1断面を研究するのであれば静態的な考察となり、継続的にみれば動態的考察となる。

ところで、ゲルキー Leonard Guelke はいう<sup>7)</sup>。歴史地理学の近代的定義には近代的なコンセプトが含まれねばならない。歴史地理学は、地球表面 the earth's surface における人間の活動（経済的・社会的）の歴史として考えられる。歴史地理学における問題解決のカギは、過去の事実のなかから歴史的な事実を区別することにある。そして、そこでは human idea（人間の考え方、人間の着想）が主眼点となる。かくて、地表における人間の行動に基本的に関係するのは知覚 perception の研究であり、それが歴史のコンセプトになるという。

人間は地表面を離れて生活することはできない。集団で生活する人間には、それなりに経済的な活動領域が必要であり、そこに大きな背景となっている自然の動きのなかで、人びとは常に何かを知覚し、それを現実の生活や生業の面で生かし続けてきた。知覚の内容を地域の現状に即して研究することは歴史地理学研究の基礎に置いたことは理解できる。なお、歴史地理学は取扱う資料によって文献歴史地理学と考古地理学に2大別される。この歴史地理学的内容は当初は歴史学からアプローチされたが、現在では地理学がその重要性を認識して地理学のなかに1つの学問領域を形成するに至っている。

---

7) Leonard Guelke: — Historical understanding in geography — An idearlist approach, the Press Syndicate of the University of Cambridge, 1982, P. 21.



東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

さて、世俗的な意味で「土地柄」ということばがあるが、それは当地の居住者と周囲の自然現象などを同時に含めての表現である。すなわち、地域がもつ環境の自然的側面と社会的側面の合成でもある。各地に住むそれぞれの人間集団では、時々刻々に各自が知覚を重ねているが、そこでは鋭い直感の働く場合もあろうし偶感の場合もあろう。それらが時間という埒堦のなかで醸成され、地域としてまとまったもの（地域性）が形成されていく。「土地柄」といわれるものは、まさにこのような姿ではないだろうか。

なお、ゲルキーはいう。知覚研究につながる歴史のコンセプトは相互に連動し合う ideas（すなわち、地理的・経済的・政治的・社会的な内容など）と基本的に関係することで、人間は知覚—体験—行動の連続のなかを生きており、そのなかに安全と調和とを求めて地域社会を形成してきた。歴史地理学は過去の 1 断面を他地域との比較において考察する場合もあるが、特定の時間的経過のなかで地域性の変化を追究する場合もある。しかし、この両者には明瞭な境界のない場合もある。どちらの研究方向は大筋では決まっていますが、研究のなかの部分々々では渾然としているが、それは論理の展開上やむを得ないと考えられる。

さて、此学の立場から「馬」分野への接近では種々の研究方向がある。すなわち、

- A 馬の分布とその立地変化
- B 馬の存在と周囲の諸条件との交互作用
- C 馬の存在に関する地誌的考察

などであり、これらはいずれもグローバルに展開されるもので、幅広く奥深い。しかも相互に深い関係があり A，B，C は三角の各頂点で、A を頂点にすれば B と C は水面下にあって基礎部分を構成する。もちろん、この 3 者には歴史的視点があって中心部分となる。そこでは文献や遺跡・遺物に基づく歴史学としての研究成果だけでなく、民間伝承およびその関係者としての常民 common people の生活・生業を本旨とする民俗学の研究成果からも協力を得なければならない。

俗に東日本（とくに中・近世の東北）は馬中心、西日本は牛中心というが、西日本と雖も大化改新で定めた国内主要道には駅制が敷かれ、約30里（約16キロメートル）ごとに駅馬や駅子のいる<sup>うまや</sup>駅屋が置かれ、山陽道は20頭の馬を各駅に配置した。当大学の付近という古代の土茂（伴）郷もその例ではないかという、前原（アストラムライン伴中央駅付近）は「ウマヤバラ」の訛だと地元の関係者は伝承してきたという。安芸府中が古代の安芸郷だとすれば、駅屋郷も近くにあったろう。馬の飼育は、当時の農業土木の技術として直ちに水田化できないところであったと思われるから、その点では馬木（広島市東区）を考えるも可である。これを「ムママキ、ウママキ」と読んだのが現在の「ウマキ」になったと考えるのである。

古代から中世へ、東北の水田化も徐々に進んだことであろうが、原野も広く残り有事・平時での馬の需要は大きく、地域の収入に重要な部分を占めたようだ。中世鎌倉幕府は馬飼に優れた技術をもつ武士を東北に地頭として送り込んだという。中世東国武士の地頭としての西下はいろいろと話題を提供しているが、いずれも武士としての実力者であり、馬をめぐる諸事情にもそれなりに対応できる実力を有していたのではないか。

中世、承久の変（承久3 - 1221）後鎌倉幕府は西日本の上皇方勢力地にも新補地頭を配置した。豊平町周辺では吉田荘に毛利氏、大朝荘に吉川氏、三入荘に熊谷氏、八木（安佐南区）に香川氏、金山（<sup>かなやま</sup>銀山—武田山—安佐南区）に武田氏などが入り、平氏関係の勢力地は没官領として取上げ、その場所に彼らを定着させた。

広島花崗岩（後述）の名称があるように県内を広く覆う花崗岩の風化した地層からは、主に中世には各地で砂鉄が採取され、豊平町域もその例に洩れず、1つの見方によれば約200カ所もの「野だたら」の跡があるという。大朝の吉川、吉田の毛利、金山の武田氏なども鉄の支配をめぐって豊平町域への勢力拡大を図った点が十分に考えられる（鎧は鉄製で、これに鞍をつけることで騎兵戦が可能になった）。鎌倉末期厳島社家の預所となった現在の戸河内町に支配者として入部した栗栖氏は<sup>ほっさか</sup>発坂・岩田両城（土居

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

地区付近)の一族という小坂氏(堀城—加計町殿賀)は町域戸谷の南半に勢力を展開し(現在も氏子は堀八幡宮に)，上阿坂の笠天山城の笠間氏(吉川氏に所属)とも対立したことがある。

『広島県農業発達史第三卷』によれば<sup>8)</sup>，近世山県郡中原・西宗両村は古来，天然牧野に適していると言い，里伝では仁安年間(1166～69)西宗の四満津に清管正紀が居て養馬の適地と判断し種馬を購入して，近隣の賛成者を得て蕃殖を図って成功し，その結果として頼朝の磨墨や佐々木四郎高綱の池月(宇治川合戦—1184)の名馬を産したという。この伝承は別として，多少なりとも当地が古来産馬の地であったことの実証だと述べている。もちろん，磨墨(摺墨)や池月の伝説は前掲6)の第一集に集録されている。

## 2 「ムマ」，「ウマ」の表現から

「むま」や「うま」をめぐる背景には如何なる事情があるのだろうか。表1は930年頃とされる源順撰による和名類聚鈔(以後，慣例に従い和名抄と表現する)から関係するものの大部分を抜粋したものである。和名抄はわが国では最初の百科辞典といわれ，それによってそれまでの当時のわが国の諸事情を全般的に知ることができる。なお，表中の最後にある拾芥抄(鎌倉時代中期の成立から追記があり流布本の多くは1640年版によるもの，百科事典)も古代から中世を知る上で重要な手がかりとなる。文献としての古事記(712)，日本書紀(720，日本紀ともいう)の後を受けての和名抄であるが，表1のようにすでに古代にあってムマ・ウマが同時に使用されていたことがわかる。また，750年代以降での8世紀後半の和歌4500余首を含めた万葉集のなかにもムマやウマが使われている。

古事記では，上巻一三九での「馬<sup>ウマタハケ</sup>婚，牛<sup>ウシタハケ</sup>婚，鶏<sup>トリタハケ</sup>婚，犬<sup>イヌタハケ</sup>婚の罪云々」，同一五一での「百濟国王照古王，牡馬<sup>セウコ</sup>壺正牡馬<sup>ヲマヒトツ</sup>壺正を阿知吉師に付けて貢<sup>アチキシ</sup>タテ

8) 『広島県農業発達史第三編』P. 985。

表1 和名類聚鈔にみるムマ・ウマ関係の表現から

ムマ, ウマ (☆印は地名)	呼称 (片仮名), 関係内容
無萬	ムマ (馬)。
無萬加比 (圀人 <sup>ギョジン</sup> ) 養馬者也日本紀云馬子。	ムマカヒ—うまかい, 馬圀 (バギョ) のこと。
無萬岐 (牧)。	ムマキ。仮名の表現例はこれのみといわれる。牧を置きて馬を放つ (日本書紀天智秋7月)。
無麻岐沼 (馬衣) 馬被也。	ムマキヌ。馬の背にかぶせる布, ウマギヌ。
武徳殿 (牟萬岐止乃)	ムマキトノ。端午の節会などで騎射や競馬を見物するために, 宮中ではこれをあてた (馬場の殿)。
厩 (無萬夜) 牛馬舎也。	ムマヤ, 馬厩, 馬屋, 馬舎。馬を飼う小屋 (宇麻夜一万葉集)。
驛唐令云諸道置驛者每三十里一驛 (無末夜)	ムマヤ。街道16キロメートル毎に設け馬と食糧を調えた (宇馬夜一万葉集)。
<div> <div>馬田 (無萬多) [注: 筑前国下座郡の郷名]。☆</div> <div>馬野 (無萬乃) [注: 上総国海上部の郷名]。☆</div> </div>	ムマタ。
	ムマノ。
<div> <div>子之子為孫 (無萬古) —云 (比古)。</div> <div>出之子為離孫男 (無萬古乎比) 女 (無萬古女比)</div> </div>	ムマコ, ヒコ。曾孫はひひこ; ひご
	ムマコヲヒ, ムマコメヒ。
馬蜩一名蜩 (無末世美) 蟬中最大也。	ムマセミ, 馬蜩 (バチュウ), 蜩 (ベン, メン)。
馬蛭一名馬蟻 (無末比流) 蛭之大也。	ムマヒル, 馬蛭 (バヒツ), 馬蟻 (バコウ)。
<div> <div>馬菟 [注: 野菜類第二百二十九の項]</div> <div>梅 (宇女) 似杏而酢者也。</div> <div>馬杷 (宇麻久波一云馬齒) 作田具也。</div> <div>馬刷 (午麻波多氣)</div> </div>	ウマヒユ, 馬菟 (バケン), すべりひゆ, ぬめりひゆ。
	ウメ, 別に古語として“むめ”。
	ウماغワ, マグワ。
	ウマハタケ, 馬櫛 (マグシ) = 馬の毛を梳 (ス) く櫛。

東：「むまわたりはし」,「うまわたりはし」

柳（與勢波之良）繫馬柱也。	ヨセハシラ，馬を繫（ツナ）ぐ杙（クイ）＝馬柳（バゴウ）。
櫪（之岐以太）馬櫪也。	シキイタ，馬櫪（バレキ）。
騎射（宇末由美今案馬射即騎射也）。	ウマユミ。射獵（ウマユミ—日本書紀）。マユミ（騎射—キシヤ）。上記「武徳殿」参照。
食槽（宇末乃岐保禰）。	ウマノキホネ。
槽（與舟）馬槽也。	ヨフネ，ウマフネ。古事記は馬 <sup>ウマ</sup> 木 <sup>フネ</sup> と表現し，飼葉を入れる器であるという（192段）。かいばおけ。
有漢（字萬）〔注：備中国賀夜郡*の郷名〕。 ☆	ウマ，*その後賀陽（カヤ）郡と上房（ジョウボウ）郡に分離し，当地は後者に所属（拾芥抄）。

マツ  
上りき」によってもウマ，マなどの存在がわかる。なお，後者はその続きとして「若し<sup>サカシビト</sup>賢人あらば貢上れ」というわが国の要望に対し，百済の国王は<sup>ロムゴトマキ</sup>論語十卷，<sup>センジモムヒトマキ</sup>千字文一卷併せて<sup>トヲマリヒトマキ</sup>十一卷を是の人に付けて<sup>コ</sup>貢進<sup>タデマツ</sup>りき」と述べている。この賢人は和邇吉師であって（キシは尊称，日本書紀はキシを<sup>キ</sup>岐で表現），<sup>バヒツ</sup>馬匹改良のために良馬を輸入したが，その頃には論語や千字文などもわが国へ入ってきている。阿知吉師は阿直<sup>アチノフミビト</sup>史等の祖といい（古事記），地志や国志の記録を職とした氏で，その下に史部あって大部分は帰化族であり，阿直史は著名な氏であった。和仁もこの系統で<sup>フミノオヒト</sup>文首であった。

つぎに，日本書紀ではムマ，ウマの表現がある。雄略天皇九年秋七月の条では，<sup>アスカベノコホリ</sup>飛鳥戸郡の人<sup>フヒト</sup>田辺史伯孫<sup>ムスメ</sup>が自分の女が婚家先で女の児を産んだとき，<sup>ヨロコ</sup>聶の家に<sup>アカムマ</sup>賀びを云って月夜に還ったが，そのとき「赤駿<sup>ノ</sup>に<sup>ヒト</sup>騎れる者に逢ふ」と表現している。同じく雄略天皇十三年春三月の条で「ヤマノベ（山辺）ノ，コシマコ（小島子）ユエ（故）ニ，ヒトテラ（街）フ，ウマノヤツゲ（八匹）ハ，ヲシケクモナシ」とある。街うというのは自分のことを吹聴するという意味であり，ヤツゲはヤツギに，ウマは宇麼に表現した書もある。要するに古代から音韻としてのンは文字としてムで表現してい

たわけで、ンマとウマの音韻関係であった。

つぎに、万葉集ではウマ、ムマが併用されている。すなわち、巻第十九4154段に、「秋附婆 葦子開尔保布石瀬野尔 馬太伎由吉民 乎知許知尔 鳥踏布美立……」(秋づけば 萩咲きにはふ <sup>イハセノ</sup>石瀬野に 馬だき行きて <sup>をち</sup>遠近に <sup>こち</sup>鳥踏み立て……) とある。石瀬野は高岡市の石瀬と<sup>イシセ</sup>かい、馬だきは馬を操ることで、鳥踏み立ては鳥を追いつ立てることであるという。要するに銀メッキの鈴をつけた鷹(飼育している)に鳥を獲らせるという筋書きである。また、巻第二十一4372段に「不破世伎 久江豆和波由久 牟麻能都米 都久志能佐伎尔 知麻利爲豆……」(不破の関 <sup>ク</sup>越えて<sup>ワ</sup>吾は行く <sup>ムマ ツメ</sup>馬の蹄 筑紫の崎に <sup>チマ</sup>留り居て……) とある。いわゆる防人が、太宰府付近の海岸から長門の海岸を守るために派遣されるが、そのときに美濃国不破郡関ヶ原を通過したわけである。すなわち、猛き男もしばし立ち止まり、行くのをはばかり不破の関を越えて私は馬で行く。この馬も筑紫の岬にとどまって、私は潔斎していよう。人びとは無事でと神に願おうという筋書きのなかにある。付記すれば、馬の蹄(爪)は筑紫にかかる枕詞である。すなわち、東国からみて遠い筑紫の地に馬がやってきたのだということを、足ということから爪にかけている。

橋本進吉<sup>9)</sup>は「うし」の「う」と「うま」の「う」は古く同音であったが、「うま」の場合はこれが「ンま m—ma) の音に変じてウとンの2音になったという(『古代国語の音韻について他二篇』)。すなわち、音韻組織は時代や場所によって変化するという。その1例を本稿で考えるならば、表1から平安時代の「無萬・無末, m—ma」のような表現は、記紀万葉の奈良時代にはみられなかったようで、「馬, 宇麻, 宇麼, 牟麻」などがある。すなわち、奈良時代ではウとンの2並用であったものの、ウの方がよく使用され、それが平安時代から以降では双方ともに使用されていたとする一般的な考え方につながるように思う。

9) 橋本進吉『古代国語の音韻に就いて 他二編』, P. 157。

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

場所による変化としては、たとえば防人の歌にあった「牟麻」は東国で使用されていた表現であろうという。万葉集は多くの人びとの歌を選んだものであるから、各地での表現がそのまま掲載されており、ことばの広がりを考える上でも興味の湧くところである。また、古事記は天武天皇（672～686年頃）が帝紀や本辞の真正を伝えるべき稗田阿礼に命じて誦習させていたのを元明天皇が太安万呂に命じて（711年—和銅4）撰録させられたものである。それが書紀のように漢文でなく漢字の音訓を混用した特殊な漢文体で、古代社会の実相がそのまま表現されているのではないかという。馬の韻におけるンとウと2つの始まりを考える原点の1つに古事記を求める所以がある。

日本書紀は日本紀ともいわれ、古事記と同じく天武朝の修史事業に始まるというが、<sup>トネリ</sup>舎人親王が720年に編集し奏上したものである。帝紀や本辞以外に有力豪族や官庁の諸記録、有名無名の他書の引用もあり、幅広く当時の世情に接することができるものの、中国の史書にそって神武帝以来の強い編年体に合せるため史実から離れている点のあることも指摘されている。しかし、古代への手がかりを得る上では重要で、記紀万葉を受けた平安時代の和名抄の研究によって、音韻の追究にタテとヨコの広がりに加えた時間的变化を組み入れることができる。

中世以降でもムマは存在し、井原西鶴の文にも（むまの<sup>クツ</sup>沓を作って今日のなりはひにして暮らした）というし、現在では普通にみられる餞別も和名抄以後で使用されたとみられる「むまのはなむけ＝馬の餞」に起因する。すなわち、旅立つ人の行路の無事を祈って門出の方向に馬の鼻を向けてやったということで、旅の前途を祝して金品を渡したり酒食でもてなしたりしたのである。そして、歌を詠み文に表わすなどで感情の表現を吐露している。むまが中央で文学に残り、中世～近世に命脈を保ったところに、そのことばの地方への波及と地方での近代までの延命を考えさせる。

かくて、ムマやウマの研究から、それがンで始まったことば、ウで始まったことばを国語的に韻を考えながら研究するのは、それで可としながらも、

さらにその背景とを中央と地方、文学と伝承説話などタテにもヨコにも広げること、中央では消えても地方に残る古くからのわれわれ日本人の文化の1素材に迫りたいわけで、もちろん、そこには経済開発とそれに支持された文化の存在を無視できず、当該研究に対する歴史地理学の立場が鮮明になってくる。

### 3 ムマ (ンマ)・ウマ, その背景から

標記の音韻はともに古代から存在したもので、方言が各地にあるように中央と地方でことばも独り歩きすることは自然の姿である。平安時代以降、中央部ではムマもよく残り和歌・物語・文学のなかにも息づいていたようだ。しかし、鎌倉幕府や江戸幕府、古代の太宰府の影響を受け継いだ北九州など地方の開発が進み、群雄割拠の時代を経過するなかで、平時（農業経済の発達）の牛、有事の軍馬、商業および流通の馬（駄送）など、ウマはウシと常に並行して都鄙を問わず利用された。かくて、ウシの韻に引きずられてンマもウマに変わらざるを得なかった一面はないか。

さて、地域と人間居住の関係を考える地理学、そのなかで歴史性を中心に置く歴史地理学では時代を生きた人びとの知覚とその表現を重視する。すなわち、口伝や伝説を中心に考えるもので、文献という実証性がなくても研究の対象にはなるわけで、ムマやウマの地域的な所在を考える手段になる。

話しことば spoken language と書きことば written language がある。前近代では大半の人びとが前者に関係しており、別に文字が書けなくても口うつしにことばや意味を伝えることができた。生活と生業における経済の発展や充実が歴史とともに変化していくなかで、1日の生活時間は同じであるから労働加重になりがちで、馬の場合ウマとンマの音韻の2系列は、単純に発音しやすいウマに変わっていかざるを得なかった面はなかったか。

地方経済の発達とともに、しだいに東日本を中心とする馬、西日本を中心とする牛と云うように地方の風土を反映した形が表面化してきた。その



東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

ことばの接点でも京都があり，貴族使用の牛車や有産階級の娘の粉河寺詣のように従者を連れた馬の旅の姿がみられた。各地の物納年貢の京都への輸送では西日本の山陽・南海道は船によることがすでに奈良時代から容認されており，平安時代以降の荘園化のなかでも高野山その他中央社寺（例，東寺）への物納に水上輸送は一層発達した。京都への年貢の搬送では淀川を遡上って淀が終点であり，そこからは半日かけて馬車で中央官庁や東寺などへ運んだ。また，その物納年貢を販売するための東・西市ができ，縫い針や各種の織物，金箔などの技術が発達し，加工産業も京都で発生していく。東北の金銀は馬によって京都へ送られていたし，古代の防人も馬の旅であった。中国の南船北馬に類似した西船東馬の感が深い。

東日本の海上には最初から外海航行であり，海難を避けるために最初から大型の堅牢な船体が求められ，航行技術も一層高度なものが必要であった。神話による日本武尊の東征では，弟橘姫が相模灘で荒れ狂う海神を鎮めるために，自ら海中に身を投じたため一行は無事に安房へ上陸できた。伊勢～安房は古く東国連絡の重要なルートで，その喉元に鎌倉幕府があって広い関東平野から東日本全域へ行動の視野をもつことになった。結果的に馬は鎌倉を中心に1日の人間の行動範囲を遙かに広げるために重要な役割をもち，その日常行動に馬という傾向が主に承久の変（1221）の前後で本補地頭・新補地頭の西日本への有力武士の西行につながり，西日本に広くウマの観念が定着するようになる。

もちろん，古代の馬牧は畿内中心に営まれたが，関東にも官牧が設けられると同時に，太宰府や中央との連絡を主として駅制が整備され，全国的に馬への関心がもたれたことがその下敷になっている。方言や訛りがンマやウマにみられても当然の素地は十分にあっただろう。

ところで，吉田兼好（1283～1350）についてふれたい。彼は和歌もよくしたが、『徒然草』（1330～31頃）の第121段で「養ひ飼ふものには，馬・牛。繋ぎ苦しむるこそいたましけれど，なくてかなはぬものなれば，いかゞはせん。犬は守り防くつとめ人にもまさりたれば，必ずあるべし。されど，家

毎にあるものなれば、殊更に求め飼<sup>か</sup>わずともありなん。云々」<sup>ノ</sup>として馬と牛を最高に同じ地位に置いている。ここで種々の点が関係して考えられるが、当面するものとして、

- A 馬と牛を並立して最高に重要視している。
- B 京都<sup>ミヤコ</sup>に住む人であっても農業面に深い知識と関心をもっている。
- C 現代とはちがった意味で社会に不安があり、やはり犬が身近な守護者としての立場にあった。
- D 馬と牛を並立しているが、なぜ馬が先にきているか。

などがある。馬や牛に乾草は必要であるが、同時に麦や豆も飼料として重要だ。先ずAについて考えてみたい。

万葉集3096段の歌に麦がある。「馬<sup>ウマ</sup>柵<sup>セ</sup>越しに麦<sup>ハ</sup>食<sup>ノ</sup>む駒の冒<sup>ノ</sup>らゆれどなほし戀しく思いかねつも」であるが、大意は（馬柵越しに麦を食べて叱られる駒のように自分も叱られるけれども、なお恋しくてじっとして思い続けていることができない）ということである。牛飲馬食ということばがあるように牛や馬は大食性であり、「馬は宵に飼え」といわれるように十分な労働力を期待するのであれば、前日の夕方に麦や大豆（煮たもの）をしっかりと食べさせて置くことである。馬は麦が好物だから、ヨーロッパでも馬と麦は切り離せない存在である。歌の作者は彼の日常生活のなかで余程深く印象づけられた光景に接しており、また、この歌の選者も歌の内容とともに平常よくみられる光景として、微妙な心の動きを生活のなかでよく捕らえていると判断して、ここに採用したのであろう。

わが国の古代の中央政府は稲作とともに麦作を強く奨励したが、米が生活や経済の中心である以上、麦は主に青刈りも含めて家畜飼料の対象となっていた。開発の初期では山や河川の水を引いて水田化に努力し、その可能性のないところは畑地化する風潮があった。畑ではヒエ、アワ、ソバなどともに麦も植えられたが、労働力の十分におよばない部分は牧場になるか、自然の山野として残された。この歌から古代人の生活が推定される。すなわち、宅地→水田→畑→牧場→自然の山野の形をとるが、この場合地形的

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

には宅地を中心とする同心円的展開から畑地と牧場を同じ位置に置くこともあったろう。いずれにしても、馬や畑が水田と同様に古代人の傍にあったことがわかる。

石器→青銅器→鉄器という時代的視点では、わが国では青銅器と鉄器はほぼ期を同じくして弥生時代に入り、古墳時代には完全な鉄器時代であった。<sup>ウシグワ クワスキ</sup>牛犁（犁：牛や馬にひかせて耕地を掘り起こす道具）、<sup>(ウ)マグワ クワ</sup>馬鋤（鋤：耕起用と地ならし用の2種で図のものは後者）の名称があるように深耕（深さ20～30センチメートル）用にはとくに牛によるスキが利用され、すでに荒起しした耕地での地ならしにはマグワといって馬が使用されることもあった。豊平町域も含む中国山地部一帯は砂鉄の産地で野だたらしも多かったが、いずれにしても鉄の普及は農具の質を飛躍的に向上させ、農業生産を急増させた。

しかし、肥料の確保には常に留意し里山は採草地として地区で共同利用していたが、馬の飼養は輸送や軍馬を主目的にしながらも厩肥を一層確保する目的も十分にあったことで、この点国中がほとんど農業中心の社会であり、兼好も宮中に奉仕した役人として知識も早くから入手していたのであろう（B）。

わが国が全域的に農業生産を高めるなかで、特産物も各地で目立つようになり、交通も発達する。他方、国衙領・荘園・地方領主層・地頭・大地主などはそれぞれに限られた領域内での生産向上の競合性、それらをめぐる戦乱などを含めて、広く商業の発達や都市を中心に資本の蓄積化があり、社会不安のなかで犬の存在が評価されている（C）。

牛馬の飼養目的はこのように農耕・肥料採取・運送（搬）などにあったが、平安時代貴族の牛車があったように、地方では土豪が関係する程度であった。近世になって世情が安定するにつれて一般農家にも飼育が広がったものの、土地の生産力もあるがとくに商業目的を考えない点では7～8反以上の水田耕地がなければ家畜の維持は困難であった。京都付近は早くから商業作物も市場に出廻っていたようで、その点では付近の農家は地方

に比べていくらか経営上有利な条件下にあったろう。京都在住で御所勤めの兼好が当時の市中や農村の事情をどのように理解していたか明瞭ではないが、敢えてDを考えるとすれば、京都をめぐる対地方の人をめぐる諸交流で馬の存在が大きく彼の脳裏にあったのだろう。

#### 4 地域の風土と馬

風土について国語的には(気候と土地柄)のような解釈があるようだが、この表現では自然条件を中心にした考え方である。地理の立場では一般に2つの方向がある。すなわち、先言に従ってある土地の地形・気候・地質・風俗を含む景観の総称という自然環境中心の視点である。他方、自然界とそこに住む人間が生活や生業を通じて一体化してつくり出している場所的表現という解釈があり、この方は地表に対する人間の文化的組替といったもので、自然よりも一層人間側に近いものであり、しかもそこに社会的秩序を維持して地域的には安定した状態(表面的には)で推移しているものである。ここでも、歴史は変化の過程を示すものとして重要な役割をもつ。

さて、町域は現在の日本列島誕生頃の7～8千万年前(中生代末～新生代)の変動期に広島花崗岩(先述)の噴出があり台地化が進み、吉備高原の一部を形成することになった。中国の山地部の下位に連なる中位面で、町域の大部分は標高300～500メートルである(図3)。

当地で馬の産地と伝えられる中原～西宗付近は450～500メートル付近にあり、西宗川は太田川の合流点まで約25キロメートルの比較的長い河筋であり、そのこともあって町域から南へ流出する小河内川と比べても落差で100メートルのちがいがある。それは<sup>ようろ</sup>丁川も同様で、西から小坂氏の勢力が入りやすい1条件を提供していたと考えられる。町域は北部で志路原川が可愛川へ合流して江川となって日本海へ流出し、古くは湿地のある地形ながらも水の不足するアンバランスな点がみられ(溜池が各地にある)、水田灌漑は冷涼な谷水が中心となり水温も戸谷の26℃を除けば20～21℃とかなり低い。

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

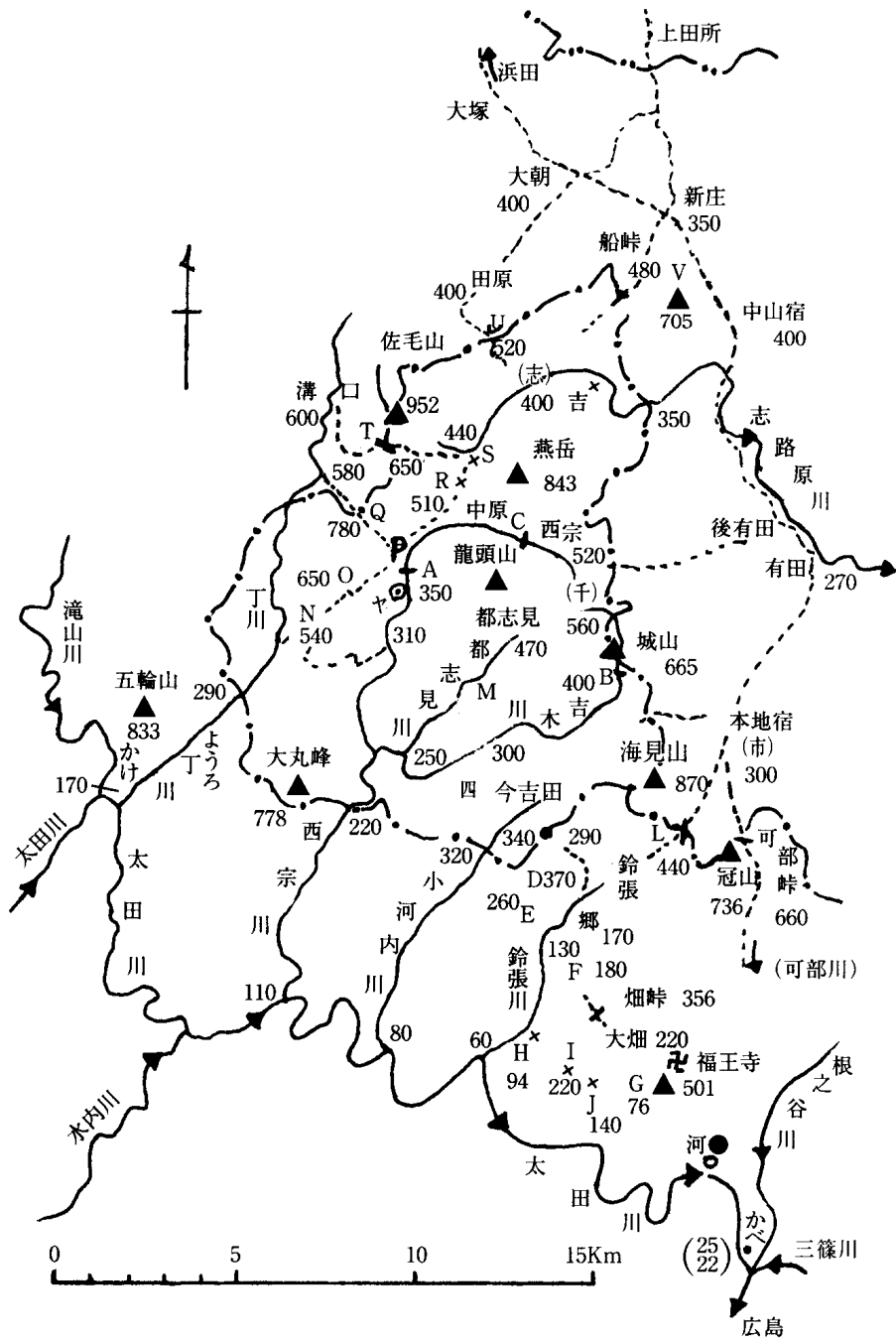


図3 豊平町付近の高度概況

- |                 |                           |                      |
|-----------------|---------------------------|----------------------|
| A：むまわたりはし(琴庄地区) | J：遠坂 <sup>えさか</sup> (恵坂)峠 | S：鳥越 <sup>とりごえ</sup> |
| B：うまわたりはし(上阿坂)  | K：榎原                      | T：椎谷峠                |
| C：うまわたりはし(西宗)   | L：明神峠(鈴張～本地)              | U：田原超                |
| D：鷹ノ巣(旧鈴張村)     | M：大筒                      | V：火野山城跡(吉川元春)        |
| E：行根(旧鈴張・旧飯室両村) | N：鶺鴒木(うづらぎ)               | ヤ：役場                 |
| F：畑             | O：十文字峠                    | 四：四辻(旧吉坂村)           |
| G：大毛寺           | P：琴谷(小十谷)                 | (千)：千町原(戦後の開拓)       |
| H：古市            | Q：岩見路                     | 吉：吉川元春居館跡            |
| I：行森            | R：分水嶺(瀬戸内海，日本海)           | 志：志路原                |

山県郡東部～高田郡西部の地域に当地域は含まれるが、概して年平均気温  $12^{\circ}\text{C}$  (広島湾岸  $15^{\circ}\text{C}$ )、5～9月平均気温  $21^{\circ}\text{C}$  (同  $23^{\circ}\text{C}$ )、積雪期間50日 (同8日) などの記録が過去にみられるが<sup>10)</sup>、年降水量1600ミリ (同1500ミリ)、無霜期間210日 (同205日) で、これらでは大差はない。しかし、水源部にあって水の流れ出す地域であること、冷たい谷水のあること、全体的に肥沃に関係しない針葉樹林地であること<sup>11)</sup>、1951年頃には一毛作田の比率が30～90パーセントとかなりのちがいがみられたこと (それは当然に戦前につながる)、馬が中心的家畜であったことなどが挙げられる。厩肥の確保のために牛を飼うのは当然であるとした当地にあって、その上になお馬を飼うということは一層すばらしいことであった。家畜を1頭維持するためには相応の土地資産が必要であり (当地付近では6～8反)、馬は採草地の山からの肥草運搬にも使用された。

肥料の確保による地力の維持は農民にとって最大の関心事でもあり、城下や海岸の船着場、舟運など交通に恵まれた場所では干鰯も入手が容易であったが、当町域はその点では不利な立場に置かれた。近世の野山は採草地として共有し、阿坂では五月三十一日を「口あけ」と云って一斉に山に入った。草は家畜の飼料として藁や糠とともに利用されたし、乾燥させてから肥料として使用した。各地で牛馬市の市立の申請が出されている背景には、多くの人が集まることで人肥の確保に見通しをつけるという意味も含まれていた<sup>12)</sup>。

10) 市町村別水温表 (昭和27年度太田川水系の水調査報告—国土調査—広島県) に依れば、現在の豊平町域を構成する旧吉坂村 (吉木郷  $20.4^{\circ}\text{C}$ )、旧原村 (西宗  $21.0^{\circ}\text{C}$ )、旧都谷村 (戸谷  $26.7^{\circ}\text{C}$ ) であるが、東隣の旧本地村～旧八重町～旧大朝町あたりで  $21^{\circ}\text{C}$ ～ $23^{\circ}\text{C}$ 、太田川流域では戸河内町～筒賀村で  $27$ ～ $28^{\circ}\text{C}$  であるが、下流部の旧戸坂村～旧深川村～旧口田村あたりで  $26$ ～ $30^{\circ}\text{C}$  になっている。水温差を365倍すれば、水温の地域差が年間を通じて作物に与える影響はかなり大きいものと思われる。

11) 西宗～後有田にはカラマツ峠があり、近世加計～有田・壬生などへの重要ルートであった。

12) 『豊平町の民話と伝説』によれば、天保時代 (1830～44) には庄原で牛市があ

東：「むまわたりはし」, 「うまわたりはし」

さて、図4に示したように牛糞よりも馬糞の方が醗酵温度が早く、しかも遙かに高くなるということが寒冷地にとっては作物の栽培に有利に働くという点がある。馬糞は1週間で75°Cの最高値になるが、牛糞は16日目

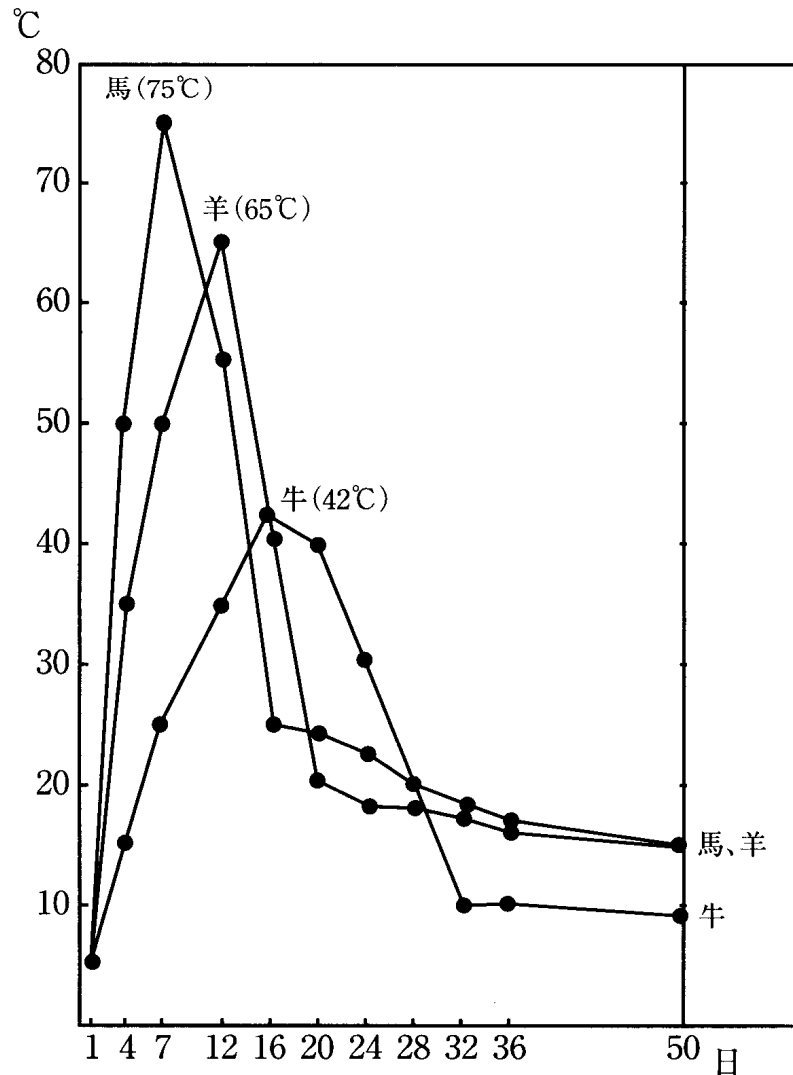


図4 厩肥堆積中の醗酵温度  
(注)『本邦厩肥の研究』より

り、薬師堂のお祭りなどの催し物や大相模興行もあったという。農村への大相模興行は地元民の娯楽という点もあるが、腕力や体力の向上を願い地域の若者の労働に対する力量アップを考えてのことでもあったようだ。高田郡の三篠川筋でも力士の墓（地元出身者や巡業中に倒れた力士など）が路傍に立っているが、当地では米俵を中心に船荷の作業で力量が問われた。豊平あたりでは年貢米や鉄荷などの作業が関係したことであろう。

で漸く 42°C の最高値を迎え、しかもその後も50日目に向かって馬や羊の 1/2 強の温度しか保持できない。馬糞の急速な高温化を抑制しながら保温を長引かせることは、広葉樹の落葉の乾燥したものをまぜる技術（その時期や量など）が、当地ではどのように継承されていたのであろうか。

以上、作物の生育に関係して低温性を高めるための厩肥としての馬糞、肥料効果の要素としての肥草採取、その双方につながる馬の役割などにふれたが、地味の問題もある。西宗付近は表土が粘性を帯び、水田づくりには多くの努力が必要であったろう。

つぎに、豊平町域は山県郡域では中筋と呼ばれ、可部峠～本地<sup>じゅく</sup>宿～中山宿の口筋に対する。可部宿から飯室・鈴張を経て当町域へ達し、溝口方面への奥筋（山県郡北西部）と大朝・新庄・中山宿方面（口筋の延長）に分かれた。当時から大朝へ出れば浜田路へ、新庄へ出れば石見銀山から出雲へのルートが開け、いわゆる Y 字形の交通ルートの接点に町域は位置し、それは西の舟運を中心とする大田筋（太田川流域）と並ぶものであった。大田筋の上部は太田川本流域との間で高度の落差も大きく山地が重畳とし、県内地形のいわゆる中・高位面と低位面の延長部（河谷）のちがいがあった。奥筋の人は中筋へ出て可部宿から広島城下を目指したのである。それゆえ、奥筋は口筋・中筋・大田筋と並んで俗称されたもののようである。大田筋の舟運に対し、陸の舟としての馬は物納の年貢輸送や鉄荷（たたら製鉄）のために重要な役割を擔っていた。

なお、奥筋から町域経由の広島行のルートは維新後もみられ、溝口（旧美和村）から岩見路（自動車ルートは椎谷峠）で都志見を経て吉木（吉木川）か今吉田に 1 泊する。翌日は可部経由で広島へ。1 日程広島で所用を済ませ、往と同じく 2 日の日程で帰る。奥筋からの出広は計 5 日の予定であったという。

地元の伝承では、安政年間（1854～60）に山県郡の代官所が本地から都志見の庄原に移転してきた。郡内の中国山地部の開発が進み（石見で採取の砂鉄を領内奥地部の山林―木炭―に依存しての鍛冶営業）、鉄荷と馬、そして馬の管理、為替米の鉄山上納など郡西部での公務も増大したためと思



東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

われる。明治期になって31年（1898）に郡役所が庄原の西の小戸（十）<sup>こと（と）だに</sup>谷に設置されたが、12年後には加計へ移転したという。郡の大勢は江戸時代を通じて東から西へ移ったわけで、以上3本のルートは可部に集約された。他方、可部はさらに現在54号に沿い吉田宿方向があり、それは広島からの出雲路や備中路へのルートでもあった。

地域の風土で自然条件と社会条件の接点に地域住民の生活と生業があり、それが風土の核となるものであるが、馬はその双方に深い関係をもっていたようだ。維新後馬匹改良が行われたようで、1883年（明治16）旧原村（現豊平町）に馬匹改良組合を設置<sup>13)</sup>、種馬2頭（宮内庁より京都府へ貸与されたものを転借した1頭や広島鎮台の払い下げ1頭）を地元の牝馬に交配している。

表2は豊平町域にみる史的变化の一展開を示したものである。最初の左側の縦列は近世村で、1819年（文政2）の国郡志編集のための差出し帳（1829年—文政10—の芸藩通志）の数値で、馬匹もそれに準拠している。1819年から1935年（昭和10）に至る約120年で、馬の数も旧吉坂村域で28.3パーセントに、旧都谷村域で18.9パーセントに、そして旧原村域で35.4パーセントに減少している。旧原村域には藩政村の西宗や中原の各村があり、牧馬の中心地を含む関係があり、鳥越が大朝や東部の本地～中山ルートからの荷動きと、鈴張や加計からの荷動き、可部方面から溝口を經由して現在の芸北町域への荷動きの接点部に当たっていたためであろう。

それにしても馬の減少と牛の全体的増加（旧吉坂村335→431，旧都谷村432→509，旧原村304→294）はどうであろうか（旧原村は牛の減少がみられるけれども）。地域周辺で馬の役割が終了しつつあった社会状況が考えられる<sup>14)</sup>。明治20年代に鈴張～鳥越～椎谷峠～溝口の自動道改良が実現し、大

13) 『広島県農業発達史第3巻』P. 987。

14) 1996年で全国の馬の頭数は28,000とされ、そのうちの16,300（58.2パーセント）が北海道にいる。2位は熊本県の2,920（10.4）が大きく、岩手県の1,170（4.1），福岡県の1,080（3.8），青森県の1,050（3.7）などで千頭を超える。第3位のグループには宮崎県860，沖縄県750，長崎県610，佐賀県550などがあり，500頭を超える。因みに広島県は40頭となっている。

表2 豊平町域の変化

1888 (明治21) までの村 (戸数・人口は 19C 初) A	1899 (明治22) 成立の村 (戸数・人口は S10) B	1956 (昭和31) 成立 C	備 考
今吉田村 (166戸 696人) 阿坂村 (226戸 1,015人) 吉木村 (227戸 979人)	(馬) 吉坂村 148 ↓ 662戸 42 2,835人 (男1,438) 女1,397	豊平町 1,757世帯 4,873人 (男2,310) 女2,563 —1998.3	郷, 馬頭観音 (大釘) 大林か ら? 馬頭観音 (勝田) (城南)  郷, 市観音
都志見村 (282戸 1,290人) 戸谷村 (434戸 1,768人) 長笹村 (130戸 600人)	都谷村 237 ↓ 731戸 45 3,179人 (男1,603) 女1,576		本郷, 庄原市の牛市, 馬場原 本郷, 中郷, 馬頭観音
中原村 (120戸 515人) 海応寺村 (20戸 105人) 西宗村 (91戸 370人) 上石村 (63戸 303人) 下石村 (61戸 293人) 志路原村 (142戸 751人)	原村 161 ↓ 465戸 57 2,338人 (男1,221) 女1,117		馬頭観音堂跡 吉川元春菩提寺を村に (福島 正則) 馬の神河内神社, 牛馬の神 「黄幡さん」 名馬 (池月・摺墨)
計 1,962戸 8,685人	計 1,858 戸 8,352人 (男 4,262) 女 4,090	19C当初比 世帯 人口 89.55% 56.10%	吉川元春居館跡, 同墓所

〔注〕 (馬) : 19世紀初頭での先行村の頭数の計 (上段), 下段は昭和10年 (1935) の当村の計。

正～昭和期では馬車から自動車輸送への転換が進みつつあった。「むまわたりはし」や「うまわたりはし」の鉄筋コンクリート化はその進展を一層考えさせるもので、バスの運行もその時期を迎えた。同時に、野山と共有地への一斉の採草作業もなくなったということである。共有地の野山は明治の山分けとともに有力な地主に買収されていき、山林の個人所有化が進ん

東：「むまわたりはし」；「うまわたりはし」

だ。肥草に代わるものとして、時代の変化のなかで乳牛の飼育の拡大、養鶏、養豚などが流行し始め、糞の処理技術も向上することとなり、野草は家畜の飼料としての立場が鮮明となりつつあった。

かくて、神の使者としての古来からの馬の存在<sup>15)</sup>は流鏑馬のような神事に残ったものの、それも時代の変化のなかで消え去ろうとしている。

### 結びにかえて

豊平の町域でみる限り、少なくとも昭和初期までは書きことばとしてのムマ（ンマ）と話しことばとしてのウマがあったわけで、京都を中心に展開したと思われるムマが、ともかくも当地にはあったということである。中世厳島社領としての三角野村は当町域の西宗や中原に求められているが、それは所有主の凡氏が平清盛を通じて厳島社に寄進したためであり、凡氏の所在や久安2年（1146）安芸守に任ぜられた平清盛の事情を考察することで、中央の文化と地方へのつながりを知る手がかりの1つが得られよう。

厳島社への三角野村からの鉄年貢の輸送では、太田川河口での同社の倉敷地（川船から海船への積替）の存在から考えて、内陸部から太田川筋はどのあたりへ駄送したのであろうか。馬から川船への仲継手段はどのようなであったのか。三角野村の東に接していた同社領の壬生荘の年貢米も同様に考えている。いずれも量が多く重い荷物ゆえ、地形的には下り坂が中心に考えられる。可部の河戸は中世から川船への仲継地であったが、壬生荘

---

15) 馬は古く神の乗物とされ、祭礼では神の移動で飾り立てをして雰囲気をも神聖化する。逆に、神への供物を馬に運んでもらう考え方もある。古く神社に生馬を奉納する代わりに絵馬を宛てたということへの疑問（柳田国男）は別として、航海の無事を祈った船絵馬もあり、時代の下降や地域社会の発達や変化とともにその絵馬の内容も天狗・剣・狐・鰻など多様さを増し、絵師も存在した。魏志倭人伝に日本には馬がいないと云っていることの誤りはすでに指摘されているところで、古来の馬は百済からの献上馬とは別に各地にいた。彼らは野馬（やむま）と呼ばれ、自然の山野に棲息していたことで他の動物や巨石・巨樹のような自然の物体と同様に神聖視される対象の1つになったものであろう。

からならば比較的容易にその結びつきが考えられる。三角野からは澄合（西宗川の太田川への合流点）が1対象地（河戸に類するものとして）として考えられなくもない。昭和の当初では馬車で澄合へ荷物を輸送しているが、太田川の川船輸送の中世での実情は未開拓の分野であり、今後の研究に期待している。

地元にもムマ（ンマ）の名を残さしめたものにかかるたの存在があろう。橋名を書くために依頼された人やその関係者たちの一致した意見があり、ここでは幼年時代のかるたの記憶が甦ることになったかも知れない。現在は地元でかるたを探しているのが実情である。

地元にもある謡曲グループでは、赤穂浪士の東下り箱根の段で馬子の勧める馬乗りをことわる場面があり、手本の紙面には「馬」とあっても、謡いでは「ンマ」と厳しく韻をふむことが要求されるという。橋名の関係者はこのあたりに関係していたものだろうか。また、「馬の神」西宗神社と云われる同社の古い祝詞のなかにウマのことばや発音はみられないのであろうか。また、狭い地域社会のなかで「ムマ」と「ウマ」が併存していた背景も考えねばならない。



写真7 西宗川馬渡橋からみた西宗神社の遠望（社叢）

東：「むまわたりはし」，「うまわたりはし」

このように推考してくると、ムマ（シマ）やウマについては、もっと多くの各地の事例を集めて深く幅広く追究していくことで、中央文化の地方への拡大過程を知ることになる。「むまわたりはし」はまさに、このことを提供してくれた将来への研究課題としての重要性を認識させるものとなった。

#### 参 考 文 献

- 日岡 巖編著『豊平町の伝説と民話』豊平町史研究会，1970年，121ページ。  
次田 潤『古事記新講』明治書院，1939年（29版），762ページ。  
日本古典文学大系『萬葉集一・二・三・四』校注：高木市之助，五味智英，大野 晋，岩波書店，1979年，各374，478，480，506ページ。  
『和漢三才図会上』寺島良安編，和漢三才図会刊行委員会，（株）東京美術，800ページ。  
平瀬徹斎，長谷川光信画『日本山海名物図会，名著刊行会，1979年，188ページ。  
渋谷敬三編著『絵巻物による日本常民生活絵引3』，角川書店，1966年，264ページ。  
『広島県農業発達史第三巻』，昼田 栄，広島県信用農業協同組合連合会，1967年，1038ページ。  
『昭和27年度太田川水系の水調査報告——国土調査——』広島県水文気象連絡協議会，広島県，1953年，259ページ。  
『広島県第2回統計年間1956』広島県統計協会，1956年，308ページ。  
齊藤道雄『本邦厩肥の研究』明文堂，1934年，422ページ。  
LEONARD GUELKE “HISTORICAL UNDERSTANDING IN GEOGRAPHY: An idealist approach” Cambridge University Press 1982, 109ページ。

Summary

“Mumawatari-bridge” and “Umawatari-bridge”  
—— from a Viewpoint of the Historical Geography ——

Terutada Higashi

There is a bridge name called ‘Muma’ in Toyohira Town, Hiroshima, which motivated me to look into the spread of the metropolitan culture to local areas. It is interesting to note that names of both ‘Muma’ and ‘Uma’ coexist in the same regions.

Therefore, it is my assumption that in the medieval period horses in eastern Japan were introduced with great force to western Japan which was growing as a cow-centered livestock area along with the development of its regional economy, and that ‘Muma’ was affected by ‘u’ of ushi (means cow in Japanese), thus assimilating to ‘Uma’. On the other hand, this seems quite natural, because the spoken language of ‘u’ etc. was more prevalent than the written language of ‘mu’ etc. in the premodern society.

However, more extensive research is necessary to further analyze ‘Muma’ and ‘Uma’ in the regions concerned.